今、本圖を見ると、兩圖とも下方に「仇英實父製」の落款をし、「十洲」の瓢印、「仇英之印」の方印を押してゐるが、二顆共に仇英筆と稱する畫に普通に見られるもので、仇英實父製の文字も、書體如何にも謹嚴ではあるが、果して彼の眞筆かどうか、遽かに決し難い點がある。一幅は、池水を繞らした園中、宴酣なる光景で、桃李花咲く邊に、燭を掲げ卓を圍んで、酒を酌み詩を案ずる四客と、傍に酒を煖め給仕する侍女や僕僮が畫かれて、李白の春夜宴桃李園序によつて有名な、雅遊の地桃李園を寫した事は明かである。然るに、他幅は、絹蓋の亭榭に數名の侍女と從者を從へた貴紳が一賓客を迎へる場面で、前庭には池水を繞つて樹石・孔雀・牡丹等が配され、彼方の長廊に酒饌を運ぶ侍女の姿も見受けられ、金谷園酒數の故事を畫いたものとは思はれない。これは、既に先人が指摘された如く、（國寶全集第四十八輯解說）本圖の卷止に「沈香亭」と記され、畫中に牡丹を畫いてある點等から推して、玄宗皇帝が沈香亭に李白を迎へる圖と見るべきであらう。

世に仇英筆と傳へられる多數の畫が、何れも細部に拘泥して、全畫面の統一に缺け、あまりにも精麗に過ぎる嫌ひがあるのに較べると、この圖は、複雜精麗の間に自ら一種のまとまりがあり、著色・描線共に秀逸で、大家仇英の畫技を想像せしめる點がある。果して仇英の眞蹟かどうかは何れ後考を俟つとしても、本圖が古くより仇英畫の傑作として謳はれ、我國畫人に親しまれた爲に、我畫界に與へた影響は蓋し尠からざるものがあつたと推察せられる。

六　鳳凰文磚

奈良南法華寺藏

堅横共約三九・五糎（一尺三寸）
厚サ約八糎（二寸六分五厘）

この磚は黝灰色、無釉の瓦質であるが、胎土は大和地方特有の花崗岩質で、中に石英質の砂粒の外、往々小礫が混入されて居り、一般の飛鳥、奈良時代の瓦類よりも一層粗鬆である。形狀は方形をなし、表面の周緣には幅約二糎半、立上り約一糎の輪郭を有するが、この周緣部は少からず缺損してゐる。文樣は、翼を擴げて立つ端麗で雄健な姿の鳳凰に流麗な飛雲文を配したもので、總べて薄肉の浮彫で表はされてゐる。これが施文法は一般の古瓦類と同樣、木型を使用したものと考へられるが、その原型は尋常瓦工の手に成つたものではなく、恐らく卓越せる專門彫刻家の制作にかゝるものであらう。

寺傳に依ると、この磚は現在龍蓋寺（岡寺）に所藏されてゐる天人文磚と共に、岡本宮址なる龍蓋寺附近より出土したゝめ、岡本宮に用ひられた腰瓦であらうと傳へられてゐる。この兩者は寸法、材料、手法等を等しくする點から少くとも同一建築の裝飾に使用されたものとは考へられるが、一方その出土に關する考古學的資料の缺如と、他方岡本宮址なるものが、屢次に亘る同所異造の皇居址なるため、明確なる制作年代を推定しえないのを遺憾とする。然しながら兩者に共通する優麗にして暢達なる浮彫の手法と樣式より推して、これが制作年代を吾が國の古瓦最盛期たる奈良時代前期の所產と見做して差支へないであらう。飛鳥、奈良時代の遺蹟より出土した古瓦は現在夥しい數量に達し、それらは用途、文樣、形式等より見る時極めて多種多樣に亘るが、建築の壁面裝飾に使用された磚の發見例は僅に上述の二例を存するのみであり、しかもこの兩者が他の古瓦類とは大いに趣を異にし純粹なる彫刻的表現を有することは特筆すべき點である。